

「デジタルデンチャー製作とその活用」

廣末将士

私は歯科技工士として働き始めてからクラウン・ブリッジをメインに仕事をこなしてきた。今でも仕事のメインはクラウンやブリッジである。

そんな私がデンチャー製作を始めたのは、今から10数年前のことになる。フルマウスをはじめとする欠損部位の大きな補綴を製作する上で、デンチャーの考え方が重要だと感じ始めていた時に受講したセミナー（BPS テクニカル認定セミナー、佐藤幸司先生）がきっかけである。その後、排列セミナー等を受講しデンチャーへの知識を深めてきた。

最近ではクラウン・ブリッジの製作をしていますが、デジタルでの仕事の割合が多く、デジタルデザインの場合、ライブラリから読みだしたクラウン形態を欠損部位に当て込んでいく作業となるため、特に欠損部位が大きくなるにつれ、排列ポジションや咬合・ガイドなど、デンチャーの要素が強くなると感じており、デンチャーを学んだことが活きていると感じている。

クラウン・ブリッジのイメージが強かったデジタルも、ここ数年でやっとデンチャーにも応用されてきた。私もミリングマシン(プログラミル PM7、ivoclar 社)の導入をきっかけにデジタルデンチャーの製作に積極的に取り組んでいる。

そこで今回は、私が現在取り組んでいるデジタル技工の中でも、デジタルデンチャーを中心に従来法と比較しながら、詳しく解説したいと思う。